

=====

CONTENTS

- 巻頭言「第76回全国学術大会に向けて」
- 第76回全国学術大会のご案内
- 事務報告
  - 2025年度第2回常任理事会議事録
- 地域部会報告
  - 2025年度関東部会定例研究会報告
  - 2025年度東海部会第2回研究集会概要報告
- 学会スケジュール（予告とお知らせ）
  - 西日本部会 2026年度大学院生研究報告会
  - 関東部会 2026年度修士論文報告会
- 第22回太田勝洪記念中国学術研究賞受賞の発表・授与について
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

=====

■巻頭言

第76回全国学術大会に向けて

家永真幸（東京女子大学）

東京女子大学は1学年800人ほどの小さな大学ですが、その割には中国研究の教員が多く所属しています。今大会では共通論題の討論者として高原明生会員、実行副委員長として大橋義武会員が名を連ね、みなさまのご参加を緑豊かなキャンパスにて熱烈歓迎いたします。

あまり知られていませんが、本学会は地方部会代表が企画委員長を兼務することになっており、会場準備は実行委員長、という役割分担になっています。そうは言っても、これまでの実行委員長は企画面でもさまざまなアイデアを出され、大会を盛り上げてこられました。今回は違います。石塚迅関東部会代表の強力なリーダーシップの下、座長をお受けくださった鈴木隆会員が大変に充実した共通論題を企画してくださいました。

今大会の共通論題は「毛沢東没後50周年、毛沢東時代を改めて考える」と題し、石川禎浩会員、鄭浩瀾会員、大野陽介会員、大澤武司会員にご報告いただきます。討論者には理事長任期満了直後（見込）の菅原慶乃会員も登壇されます。本学会の持ち味である学問分野、会員の所属地域、世代を横断するプログラム構成により、毛沢東時代を振り返りながら中国の現在と未来について考える企画です。必ずや知的興奮に満ちた場になると、私も今から楽しみにしています。2日目の自由論題・テーマ分科会にも多くのご応募をいただき、計10セッションを開

けることになりました。こちらもどうぞご期待ください。

今回は開催時期が10月から5月に移って2度目の全国大会になります。前回は過渡期を任された東海部会がたった半年の準備期間で見事に愛知大学大会を成功させ、今回はそのレガシーに助けられながら何とか準備を進めています。ひとつ非常に残念なのは、今回は会場校の都合によりアルコールを提供する懇親会を実施できません。愛知大学大会のエビフライが美味しかったので、今回も何かやる気にはなっていたのですが、東京女子大学は構内全面アルコール禁止、唯一飲酒できる同窓会館も収容人数に不安がありました。大きな学会を開いた経験のある他分野の教員に聞いたところ、吉祥寺のホテルに懇親会場をとり、4台のバスをチャーターして参加者を誘導することで何とか成功させたが、費用は1人8000円かかったとのことでした。現在の物価高を考えるとこの額で収まるとは考えにくく、また、そこまでしてアルコール提供にこだわる前例を残すと、若い世代の会員が今後の大会実行委員長を引き受けにくくなるのでは、との不安も過ぎりました。

ということで、今回は1日目の共通論題終了後、簡単な茶菓のみをご用意した「討論・懇談セッション」を設けることにいたします。参加費は無料ですので、登壇者に感想を伝えたり、研究仲間との旧交を温めたりする場として是非ご活用いただければ幸いです。今回はこのような対応となりますが、もちろん、今後の大会では会場校の自由度や実行委員長の個性に応じて、盛大な懇親会が復活する年もあって欲しいと願っています。今大会は「懇親会をやらなくても許された」前例として、いずれまた禁酒主義の大学が開催校となる際のモデルとなることを目指します。

なお、東京女子大学から最寄りの西荻窪駅、吉祥寺駅まで出れば飲食店は多数ございます。両駅とも気心知れた仲間と繰り出すにはもってこいのエリアです。大会への参加を迷っている方におかれましては、是非会員仲間とお誘い合わせの上、その迷いを断ち切っていただければ幸いです。

## ■第76回全国学術大会のご案内

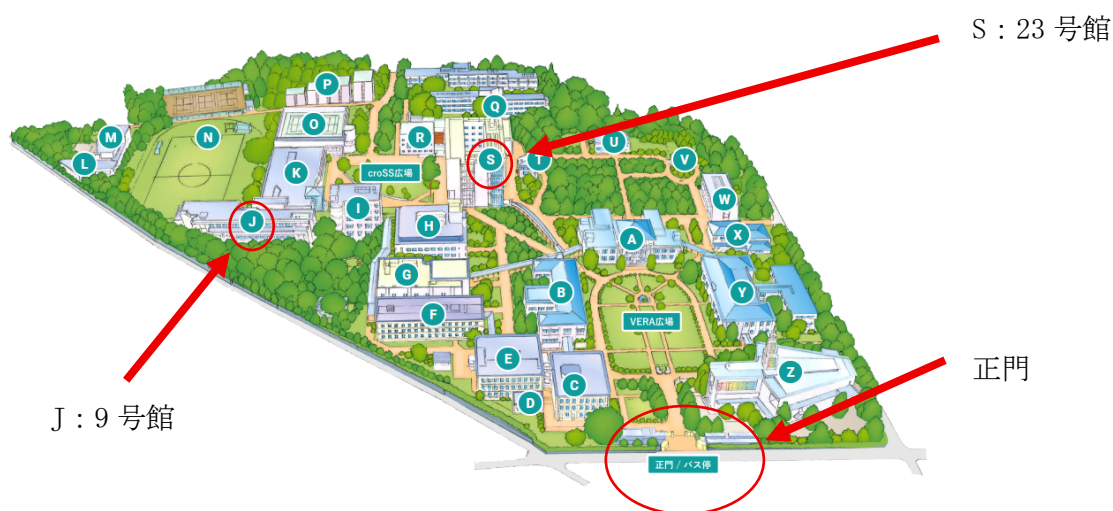
2026年の日本現代中国学会全国学術大会は、5月30日（土）と31日（日）の両日、東京女子大学（東京都杉並区）において開催されます（対面のみ）。

今年の共通論題のテーマは「毛沢東没後50周年、毛沢東時代を改めて考える」です。共通論題のほか、各地域部会のご協力により6つのテーマ分科会と12の自由論題報告からなる4つのセッションを開けることとなりました。良質で活発な討論が行われること期待するとともに、多くの会員の皆さまのご参加をお待ち申し上げます。ご参加にあたっては、事前の参加登録をお願いいたします（後述）。

今回は会場の都合により、アルコールを提供する懇親会は中止する代わりに、共通論題終了後に簡単な茶菓のみをご用意した「討論・懇談セッション」を設けます（参加費無料）。登壇者との討論や、研究仲間との旧交を温める場として是非ご参加いただければ幸いです。終了後は、西荻窪駅、吉祥寺駅まで出れば飲食店が多数ございます。

会場：東京女子大学 23号館および9号館 (<https://www.twcu.ac.jp/main/access/index.html>)

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1



アクセス :

①「西荻窪」駅 (JR 中央・総武線、東京メトロ東西線) から ※1

・北口より徒歩 12 分

・北口 (1 番のりば) より吉祥寺駅北口行バスで「東京女子大前」下車。

※1 中央特快、通勤快速、通勤特快は西荻窪駅には停車しません。土・日・祝日は中央線快速は西荻窪駅には停車しません。中央・総武線各駅停車または東西線をご利用ください

②「吉祥寺」駅 (JR 中央線、JR 中央・総武線、京王井の頭線) から ※2

・北口 (3 番のりば) より西荻窪駅行バスまたは上石神井駅行バスで「東京女子大前」下車。

※2 吉祥寺駅からタクシーを利用する場合は、「杉並区善福寺の東京女子大学」と、はっきり指示してください。

③「上石神井」駅 (西武新宿線)

から

・南口 (1 番のりば) より西荻窪駅行バスで「地蔵坂上」下車、徒歩 5 分

・南口 (1 番のりば) より吉祥寺駅行バスで「東京女子大前」下車



## 大会 1 日目 プログラム

### 2026 年 5 月 30 日 (土) 共通論題

11:30～	受付開始 (東京女子大学 23 号館 1 階)
12:00～	2025 年度総会 (23 号館 1 階 23101 教室)
総会終了後すぐ	2026 年度全国理事会 (9 号館 1 階 9105 教室)
14:00～17:00	共通論題 (23 号館 1 階 23101 教室)
17:15～18:30	討論・懇談セッション (11 号館 1 階小ホール)

※持ち込まれたお弁当などのご飲食は 9 号館 9101 教室でお願いします。

### 2025 年度総会 (23 号館 1 階 23101 教室 : zoom 中継あり)

会員総会は会場とオンラインのハイブリット形式で開催します。総会の zoom 会議室情報は事務局から 4 月 2 日に送信したメール (件名「日本現代中国学会 2025 年度会員総会の開催 (5 月 30 日 (土) 12:00～)」) に記載の情報をご参照ください。

### 2026 年度全国理事会 (9 号館 1 階 9105 教室 : zoom 中継あり)

理事会は総会終了後、別室にて会場とオンラインのハイブリット形式で開催します。詳細は何彦旻事務局長より 4 月 2 日に理事宛に送信されたメール (件名「【日本現代中国学会】2026 年度全国理事会の開催について (要対応)」) をご参照ください。

### 共通論題プログラム (23 号館 1 階 23101 教室)

#### 毛沢東没後 50 周年、毛沢東時代を改めて考える

今大会の共通論題は、「毛沢東没後 50 周年、毛沢東時代を改めて考える」です。2026 年は、毛沢東死去からちょうど 50 年の節目の年 (=文化大革命の正式発動 60 周年) にあたります。過去半世紀の間、とくに 1980 年代に中華人民共和国で改革開放政策が本格化して以降、本学会の研究活動にかかわる資料の公開や学術交流は大いに発展しました。中国語圏はもとより、日本を含む諸外国の学界でも、毛沢東の個人研究をはじめ、毛沢東が生きた近現代中国の歴史、政治、経済、文化、社会、対外関係などの多方面にわたり、多くの優れた研究成果が積み重ねられてきました。

しかし、2012～13 年の習近平政権の登場を一つの契機として、研究者をとりまく状況は大きく変化しました。中国国内では、国家安全保障の名目のもと、当局による言論統制が以前にも増して強まっています。新冷戦とも称される米国と中国の対立激化とも相俟って、研究者やビジネスパーソンは、以前に比べて安心して中国を訪問したり、現地での各種調査を実施したりできなくなりました。日本をはじめ各国社会でも、特定の国・地域を敵視する排外主義の国民感情も広まっています。

こうした複合的要因により、本学会の名称に掲げられた現代中国研究も、学問の自由と学問の独立がある種の危機に直面しているように思います。「第二の毛沢東」とも評される習近平の政権担当期間において、冷戦期のような〈分断の時代における現代中国研究〉の状況がふた

たび現出しないという保証は、残念ながらありません。

以上のような現実を念頭に置きながら、今年の共通論題では、〈かつて実在した分断の時代の現代中国研究〉が十分に捉えきれなかった毛沢東時代の実相について、歴史、政治、社会、文化の各方面から現段階における研究の到達点を改めて確認するとともに、それら最新の知見を踏まえた今後の研究活動の方向性を展望したいと考えます。そのことは、毛沢東時代という過去の再考にとどまらず、習近平時代の現在と未来を展望するうえでも、歴史的視点を踏まえた重要な論点や分析の視座を得るための手がかりを提供するでしょう。

本共通論題では、毛沢東時代それ自体を直接に体験していない、あるいはほとんど実見していない若手・中堅・ベテランの方々に、報告者や討論者として登壇をお願いしました。研究者の世代の面でも、毛沢東時代の相対化を図りつつ、フロアとの質疑応答や討論では、当時の時代的雰囲気や視座を直接に感得し知悉した大ベテランの方々と丁々発止のやりとりを期待しています。

まず、石川禎浩会員から基調報告的位置づけとして、政治史を中心に毛沢東時代に関する全般的な総括を行っていただきます。次に、社会・文化・外交について鄭浩瀾会員、大野陽介会員、大澤武司会員から、各分野の研究潮流と自身の研究活動に基づいて毛沢東時代を振り返ってもらいます。これらの報告に対し、高原明生会員と菅原慶乃会員からコメントをいただき、フロアとの質疑応答を含むより大きな議論へと接続していくことを期待します。

司会・趣旨説明：

14:00～14:10 鈴木隆（大東文化大学）

第1部 報告次第：

14:10～14:35 基調報告 石川禎浩（京都大学）

「師表としての毛沢東：歴史と向き合う」

14:35～14:55 社会 鄭浩瀾（慶應義塾大学）

「地籍整理としての土地改革：いくつかの問題提起」

14:55～15:15 文化 大野陽介（大阪公立大学）

「建国後の農村巡回公演をめぐるポリティクス」

15:15～15:35 外交 大澤武司（福岡大学）

「毛沢東の対日外交思想の呪縛：「二分論」と「軍国主義復活」批判」

15:35～15:50 休憩（15分）

第2部 討論

コメント：

15:50～16:00 菅原慶乃（関西大学）

16:10～16:20 高原明生（東京女子大学）

16:20～17:00 質疑応答・全体ディスカッション

17:15～18:30 討論・懇談セッション（11号館1階小ホール）

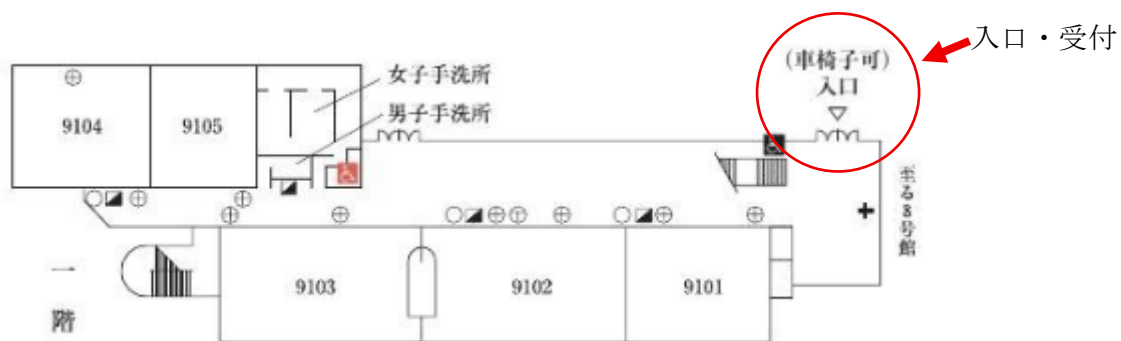
大会 2 日目 プログラム

2026 年 5 月 31 日 (日) 自由論題・テーマ分科会

9:30～	受付 (東京女子大学 9 号館 1 階)			
場所	9102 教室	9103 教室	9104 教室	9105 教室
午前の部 10:00～12:00	分科会 1 : 文学	分科会 2 : 香港(1)	自由論題 A : 地域史・地域経済	分科会 3 : 歴史(1)
午後の部① 13:00～15:00	自由論題 B : 映画	自由論題 C : 歴史・思想・教育	分科会 4 : 歴史(2)	(なし)
午後の部② 15:15～17:15	自由論題 D : 文学	分科会 5 : 香港(2)	分科会 6 : 経済・社会	(なし)

※持ち込まれたお弁当などのご飲食は 9 号館 9101 教室でお願いします。

9 号館案内図



自由論題・テーマ分科会プログラム (9 号館 1 階)

午前の部 10:00～12:00

分科会 1 【文学】戦後東アジア文学における身体・喪失・恋愛をめぐる想像と語り

企画責任者：松村志乃 (近畿大学)

司会：林麗婷 (龍谷大学)

報告者：

- ・松村志乃 (近畿大学)

「建国期の文学は身体をいかに想像したか——楊沫『青春之歌』、茹志鵬「静静的産院里」、  
『白毛女』を中心に」

- ・鄭洲 (立命館大学)

「映画受容と恋愛の実践——林海音『曉雲』における越境的感情の形成」

- ・藺豪 (神戸大学・院)

「死者と生者の声——郭松棻の小説における未亡人叙事」

討論者：

- ・三須祐介 (立命館大学)

## 分科会 2 【香港(1)】 2020 年代香港の変容

座長：倉田徹（立教大学）

報告者：

- ・安藤丈将（武蔵大学）  
「国安法後の民主化運動のゆくえ—分析手法からの再検討」
- ・澤田ゆかり（東京外国語大学）  
「香港の社会福祉における NGO の役割：ポスト国安法時代の挑戦」
- ・萩原隆太（芦屋大学）  
「『国家安全』と『法治』の交錯：2026 年『香港国家安全白書』が示すもの」

討論者：

- ・遊川和郎（亜細亜大学）
- ・但見亮（一橋大学）

### 自由論題 A 《地域史・地域経済》

座長 1：木村自（立教大学）

- ・肖童（鹿児島大学・院）  
「長江中流域を見る眼」
- ・哈木格図（広島大学）  
「蒙古連盟自治政府の樹立過程再考」

座長 2：大橋史恵（お茶の水女子大学）

- ・葛倩宏（関西大学・院）  
「貴州省における国有企業依存の現状と将来への課題」

## 分科会 3 【歴史】 近代中国における翻訳事業——とくに日本との関連を中心に

座長：孫安石（神奈川大学）

報告者：

- ・施詩懷（千葉大学）  
「近代中国における日本語教育と翻訳事業——上海東文学社を中心に」
- ・董令徳（神奈川大学・院）  
「近代中国における日本農業知識の輸入——新学会社と『実用養鶏全書』を中心に」

討論者：

- ・見城悌治（千葉大学・非会員）

午後の部①13:00～15:00

### 自由論題 B 《映画》

座長 西村正男（関西学院大学）

- ・趙晟（大阪公立大学）  
「北京から済南へ：済南の真光映画館」
- ・陳琪栄（大阪公立大学）

「小説から映画へ、そして再び小説へ—映画化を経た『霸王別姫』映画小説におけるイメージの変容—」

・張宇博（早稲田大学）

「台湾で語られる香港の物語」

#### 自由論題C《歴史・思想・教育》

座長1：水羽信男（広島大学・名誉）

・郭曉英（中央大学・院）

「1940年代における呉晗の同時代認識」

・劉承衛（筑波大学・院）

「『自由中国』知識人の自由主義論」

座長2：阿古智子（東京大学）

・武小燕（名古屋市立大学）

「香港の中学校における歴史教育の一考察」

#### 分科会4【歴史(2)】歴史のなかの人間：中国革命と社会主義を振り返る

企画責任者：周俊（京都大学）

司会：角崎信也（一般財団法人霞山会）

報告者：

・周俊（京都大学）

「中国共産党の夫人政治：革命と愛を生きた女たちの悲喜劇」

・黄喜佳（武蔵野大学・非会員）

「西北局集団の役割からみた毛沢東時代の中央・地方関係」

・南和志（大阪大学・非会員）

「毛沢東時代末期における人民外交と中国革命の終焉」

討論者：

・李昊（東京大学）

・比護遥（金沢大学・非会員）

・横山雄大（同志社大学）

午後の部②15:15～17:15

#### 自由論題D《文学》

座長 塩旗伸一郎（駒澤大学）

・山本範子（北星学園大学）

「韓松の中国未発表作品「仏性」「サリンジャーと朝鮮人」を読む」

・朱力（中央大学）

「閻連科作品における抒情性—その表現の形態と変容—」

・蔵田直美（金沢大学・院）

「中国漫画におけるノスタルジア」

### 分科会 5【香港(2)】形作られる「香港」：香港現代史の構築に向けて

座長：倉田明子（東京外国語大学） 報告者：

- ・何昊林（立教大学・院）

「香港の独自対外関係の展開：1961～1975年繊維取極交渉を中心に」

- ・瀬尾光平（大月短期大学）

「“看板のジャングル”をめぐる統治-戦後香港における景観問題と都市空間の公共性」

- ・銭俊華（東京大学）

「政治的主体から文化的主体へ——香港と『香港文学論』の再考」

討論者：

- ・村井寛志（神奈川大学）
- ・古泉達矢（金沢大学）

### 分科会 6【経済・社会】中国的福祉社会への道

座長：中川涼司（立命館大学）

報告者：

- ・中川涼司（立命館大学）

「東アジアの経済発展レジーム・福祉レジームと中国的福祉社会」

- ・楊秋麗（京都橘大学）

「中国社会保障制度の構築と国民皆年金への接近」

- ・畢麗傑（中京大学）

「中国の高齢化と持続可能な高齢者介護システムの構築—上海市浦東新区等の高齢者介護施設の事例を通じて—」

- ・任泰然（立命館大学）

「中国高齢者介護システムの郊外都市への拡張」

討論者：

- ・澤田ゆかり（東京外国語大学）

### 大会実行委員会からのご案内

・会場校の入構管理の関係上、事前の参加申し込みをお願いいたします。5月14日（木）までに以下の google フォームを通じてご登録ください。

#### 【大会参加申込フォーム】

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdhsEA5P645MoUdd4rIJek1guEg2LRQYiNR0PewYYPMV982qA/viewform?usp=dialog>

※事前登録があれば当日正門の守衛所での確認がスムーズになるためご協力お願いします。

・報告要旨集、報告論文、資料などは大会の Google ドライブに格納し、各自ダウンロードしていただきます。ドライブの URL は会員 ML にてご案内いたします。開催校からの紙媒体での

資料配布、端末の貸し出しはございません。

- ・会場は eduroam でインターネット接続が可能です。eduroam のアカウントをお持ちでない方で、ゲスト用 wi-fi の使用を希望される方は、上記参加申し込みフォーム内より登録をお願いします。事前登録がない場合、当日の申請は先着順につき、ご希望に添えない場合がございます。
- ・当日、東京女子大学に到着されましたら、5月30日（土）は23号館1階、31日（日）は9号館1階の受付にお越しく下さい。名札を作成いただきますので、名刺がある方はお持ちください。
- ・5月30日（土）は23号館1階、31日（日）は9号館1階廊下にて、中国関係書店による書籍の出張販売を予定しています。是非ご利用ください。
- ・宿泊施設についてはご自身で早めにご予約ください。会場最寄りの西荻窪駅へは JR 中央・総武線各駅停車または東京メトロ東西線でお越しいただけます。
- ・キャンパスへの車両入構は制限されています。徒歩または公共交通機関をご利用ください。
- ・キャンパス周辺の飲食店は少なく、当日は学内の食堂も閉まっております。近くにコンビニは3軒ございます。会場でのご飲食は9号館9101教室をご利用ください。
- ・ゴミは大学のゴミ箱ではなく、大会実行委員会が設置したゴミ袋に捨ててください。液体など処理の難しいものはお持ち帰りくださいますよう、ご協力をお願いいたします。
- ・東京女子大学構内は全面禁煙です。

日本現代中国学会第76回全国学術大会

実行委員長 家永真幸

企画委員長 石塚 迅

お問い合わせ先：genchu.kanto[アットマーク]gmail.com

[アットマーク]を@に変えてください

#### 託児施設ご利用時の補助について（再掲）

大会実施に際し、学会から託児補助をおこないません。会場校に託児施設はございません。会員ご自身で手配された有料託児施設をご利用される場合で、事前にお申し込みをいただいた方に限り補助を支給いたします。

補助金額はお子様お一人一日あたり 5000 円を上限とした実費払いとなります。補助金には限りがあるため、登壇者かつ非有職者の方を優先、先着順を原則として支給します。期限内にお申込みいただいても、支給できない可能性がございますので予めご了承ください。

補助をご希望の方は 2026 年 5 月 20 日（水）までに、以下宛にメールにてお申し込みください。その際に、件名は「託児施設利用に伴う補助申請」とし、本文内に**利用施設名と所在地、利用日、利用時間**を必ず明記ください。なお期限を過ぎた場合は、対応いたしかねます。

申込先：熊倉 潤（大会実行委員） kumakura[アットマーク]hosei.ac.jp

[アットマーク]を@に変えてください

## ■事務報告

### □2025 年度第 2 回常任理事会議事録

日時：2026 年 3 月 16 日（月）午前 9:30～11:30

場所：オンライン開催

参加：菅原慶乃理事長、何彦旻事務局長、楊秋麗会計担当理事、石塚迅関東部会代表、西村正男関西部会代表、加治宏基東海部会代表、小笠原淳西日本部会代表、高橋俊編集委員長、川尻文彦広報委員長、家永真幸年度変更担当、阿古智子規約・財政健全化委員

欠席：中村元哉副理事長、加茂具樹規約・財政健全化委員

\*オブザーバー：花尻奈緒子 NL 担当広報委員

#### 【報告事項】 ※敬称略

#### 1. 会務（事務局）

##### ①会員動向（2026 年 2 月末現在）：

総数 663 名（うち、団体会員 4 名）（新規入会者 22 名・退会者 1 名）/会費長期未納会員 30 名/住所不明会員 14 名

##### ②2026-27 年度理事選挙結果について

何事務局長より、2025 年 12 月 22 日に当選理事 25 名確定後、菅原理事長から各地方部会代表に推薦理事 25 名の選出を依頼し、2026 年 2 月 5 日に 2026-27 年度理事 50 名が確定した。常任理事会、新理事によるリストの確認を経て、2 月 9 日付会員全体宛メールにて告示したことが説明された。菅原理事長からは、各地方部会代表による推薦理事選出への尽力に対し謝意が表された。

##### ③J-STAGE 掲載状況について

学会誌『現代中国』について、第 8 号（1952 年）から第 96 号（2022 年）までのうち、入手可能な PDF 原稿はほぼすべて J-STAGE に搭載し、1 月 30 日付で公開した。一部の論文は原稿未発見のため未掲載であるが、過去論文へのアクセスが大幅に容易になった。また、2022 年発行の第 96 号以降の論文公開方法については、編集委員会と連携し今後の進め方を検討中であり、進捗があれば改めて報告する。

#### 2. 2026 年度学術大会の準備状況について（石塚、家永）

資料に基づき、家永実行委員長、石塚企画委員長（関東部会代表）から大会準備状況につき報告がなされた。

#### 3. 会計（楊）

2026 年 2 月 28 日時点での会員状況と決算表に関する報告があった。2 月 28 日時点での会費納入率（未納なし）は 71.3%。5 月の総会時には 3 月末日付のデータに更新して報告する。

#### 4. 編集委員会（高橋）

『現代中国』第100号記念号は3月14日現在、論文12篇の投稿を受理中、査読中である。2025年度大会（愛知大学）の共通論題および2026年度大会（東京女子大学）の共通論題を特集として掲載する予定である。合わせて特集「22世紀につなぐ中国研究 一次世代に伝えたいわたしのこの一冊」も組み込まれる予定である。100号は紙媒体発行の節目でもあり、内容面では充実したものになる一方、費用面については予算審議であわせて検討することとなった。

#### 5. 広報委員会（川尻）

- ① ホームページは順調に運用されている。
- ② 『日本現代中国学会ニューズレター』第77号を2026年1月上旬に発行した。5月中に発行する第78号を準備中である。

#### 6. 地域部会（石塚、西村、加治、小笠原）

関東部会、関西部会、東海部会、西日本部会の各代表から活動報告があった。詳細は学会HPおよびニューズレターを参照のこと。

#### 7. 渉外関係（何）

- ① 地域研究学会連絡協議会（JCASA）2025年度総会（2025年12月13日 オンライン開催）に何事務局長が出席した。また、JCASAよりニューズレターへの学会報告掲載のご依頼があり、作成をして提出した。
- ② 東洋学・アジア研究協議会総会（2025年12月6日 オンライン開催）は執行4役の都合がつかず欠席した。
- ③ 「日本学術会議会員候補」の推薦依頼（2026年1月15日）があり、締め切りが3月13日に設定されており、4役および理事長経験者で意見交換した結果、現時点では、ひとまず今回は見送り、次期推薦までの間に情報収集、意見集約をするという形で進めることにした。

#### 8. その他

菅原理事長より中研との単年度の契約更新についての報告があった。

#### 【審議事項】※敬称略

##### 1. 2026年度学術大会プログラムの承認（石塚、家永）

家永実行委員長、石塚企画委員長（関東部会代表）より報告のあった大会プログラムを承認した。

##### 2. 2025年度総会・2026年度全国理事会の開催方法、日程（菅原）

2025年度総会は5月30日（土）12:00～、2026年度全国理事会は総会終了後に、いずれもハイブリッド会議として開催することを承認した。

##### 3. 2025年度総会報告事項の承認（菅原、楊、何）

2025年度総会にて報告される下記の事項を承認した。

- ① 2025年度決算案

②2026 年度予算案

③2026 年度事業計画案

4. 全国大会幹事校の確認

2026 年度 5 月開催（関東部会）東京女子大学（家永）

2027 年度（関西部会）高知大学（高橋）

2028 年度（関東部会）未定

2029 年度（西日本部会）未定

※関西・東海・西日本部会は、奇数年の全国大会を「関西（27）→西日本（29）→関西（31）→東海（33）→関西（35）……」の順に担当する。

5. 顧問の依頼について(何)

毛里和子氏、山田敬三氏、西村幸次郎氏、高橋満氏の 4 名を顧問として総会に推薦することが承認された。

## ■地域部会報告

### □2025 年度関東部会定例研究会報告

2026 年 2 月 28 日（土）、国士舘大学世田谷キャンパス（メイプル・センチュリー・ホール第 1 会議室）において、「毛沢東時代を考える—民兵、思想動員とその時代—」というテーマで開催された。2026 年は毛沢東没後・文化大革命終結 50 周年に当たることや、2026 年度の全国学術大会共通論題テーマが「毛沢東没後 50 周年、毛沢東時代を改めて考える」であることなどに鑑みて設定した。共通の題材として 2025 年に上梓された高暁彦著『毛沢東時代の統治と民兵』（名古屋大学出版会、以下「高著」と略記）をとりあげた。まず高氏に著書のエッセンスをご報告いただき、その後、同時代の動員について別の角度から考察すべく、毛沢東時代の思想動員について、鄭成氏にご報告いただいた。その後、当該時期について長年研究を行っている角崎信也氏に両報告に対するコメントをいただき、それを手がかりとして毛沢東時代の様々な事象について活発な議論が行われた。なお、本研究会は事情により、当初告知のプログラムから変更して行われた。

#### 【報告 1】高暁彦（東北大学）「『毛沢東時代の統治と民兵』について」

主に高著の問題意識と結論及び「県レベルの檔案から何を読み取ったのか」というテーマについて報告が行われた。高著の議論の前提としてまず、毛沢東が高い国家能力や資源調達能力を発揮した理由として、近年の先行研究が指摘する、末端の党組織による説得・教育・宣伝活動など大衆動員に要員を求める説、所謂大衆動員論を紹介する。その上で、大衆動員論の問題点を指摘し、県レベルの檔案館や人民武装部史料などを利用し、共産党による統治の実態に迫る。諸史料から見える実態として、思想動員が農村の社会主義建設に寄与しなかったこと、民兵による暴力によって強制的に社会主義建設がすすめられたことが強調された。

また民兵の位置づけとして、団練や郷兵など、旧来の民間武装団体との関係も強調される。

すなわち農村における民兵と民間武装団体には連続性が見られ、社会の中にある武力資源を統合して統一的に運用したことが、毛沢東政権の高い国家能力や資源調達能力につながっていたと結論付ける。

【報告2】鄭成（兵庫県立大学）「毛沢東時代の思想動員—新時代のストーリー作り—」

高報告を受け、同じ時期の思想動員とその有効性について報告が行われた。鄭氏はこれまで中華人民共和国成立初期の個人の日記などを利用することで、共産党政権が個人の思考様式や行動規範に与えた影響について論じてきた。本報告ではまず、鄭氏によるこれまでの研究の概要が紹介された。その上で、新たな課題が示される。それは①理論と現実が衝突を起こす中で、どのようにして思想動員が行われたのか、②思想動員において、共産党はどのようにして党員や大衆の現状を把握していたのか、③共産党の宣伝内容と人々の旧来の価値観が衝突を起こした場合、どのようにして新たな論理が組み立てられたのか、などである。その上で、ソ連との比較を行いながら、主に宣伝する側の意向について分析が行われた。

【コメント】角崎信也（一般財団法人霞山会）

高報告および高著に対し、以下の5つの意義を示した。それは①中華人民共和国が1950年代に発揮した高い国家能力を支えた要因として民兵を発見したこと、②1950～1960年代の民兵の活動を、19世紀以来の「社会の武装化」からの歴史的連続性で捉えていること、③地方・基層幹部に民兵を用いた強制的政策執行を動機付けさせた、官僚制の圧力が存在していたのを明らかにしたこと、④民兵統制のメカニズムを明らかにしたこと、⑤文化大革命時期の基層政権の崩壊が、基層政権が民兵の動員権限を失ったことと関連付けて論じたこと、である。

その上で、以下のように論点・疑問点を提示した。それは①暴力に依存した統治と体制の安定はどのようにして両立されたのか、②暴力としての民兵の利用は中央に公認されたのか、③民間武装団体と民兵との間の人員構成上の断絶の有無、④文化大革命中の造反派の活動は都市近郊に限定されるのか否か、⑤分析地域の選択の妥当性である。

鄭報告に対しては、当該時期の基層レベルの人々の思想の実態を明らかにした点や指導部による指示の論法を示した点、また定例研究会全体として、基層における思想レベルの動員と暴力による動員という視点を示したことなどについてコメントされた。

【質疑応答】

上述の点コメントについて高・鄭両氏より返答が行われた。その後、フロアからの質疑応答が行われた。まず民兵の軍事的位置づけについて質問がされ、民兵が実際の軍隊として動員されることがあるのか否か、また在郷軍人会としての役割もあるのか、といった点について質問された。これに対し高氏より返答があり、実際の有用性は不明ながら、中越戦争などでは民兵が前線に送られたことが確認できること、民兵組織には確かに復員軍人なども含まれていたと回答された。また、高氏が議論の出発点とする、大衆動員論について、そもそも大衆動員は政権による強制などを含むものであり、民兵による暴力と大衆動員は矛盾しないものではないかという指摘もされた。

このほか、それぞれ史料が持つバイアスなどについても質問がされた。加えて、高・鄭両氏

に対して民兵の地域差や民兵の思想について質問がされるなど、活発な議論が行われた。

今回の定例研究会の参加者は 14 人と比較的少なかったものの、予定した時間を超過して議論が行われ、非常に刺激的な会となった。[記：河野正会員]

## □2025 年度東海部会第 2 回研究集会概要報告

日本現代中国学会東海部会第 22 回（2025 年度第 2 回）研究集会が、2026 年 2 月 28 日（土）に愛知大学名古屋校舎厚生棟 W32 会議室（対面式による開催のみ）にて行われ、活発な質疑応答が交わされた。入会への門戸を広げる目的もあり、今回は非会員 2 名を含めた 4 名の報告での開催となった。以下、報告者から提出された報告要旨を掲載する。

武小燕（名古屋市立大学客員研究員）「中国の憲法教育に関する考察—中学校の「道徳と法治」の内容を中心に—」

本報告は、中国における憲法教育の変遷と現状を、中学校科目「道徳と法治」を中心に分析したものである。改革開放以降、法制度の整備とともに憲法教育は次第に重視されてきた。2010 年代に旧「思想品德」科に代わって導入された「道徳と法治」科では、中学 2 年後期用教科書の主要テーマが憲法教育となっている。初版となる 2017 年版教科書では、「国家のすべての権力は人民に属する」といった立憲主義的記述が多く、公民の権利・義務や法が強調された。一方、2025 年版では内容構成が大きく変化し、国家制度や国家機構に関する説明が増え、党の指導性を強調する記述が中心となった。その結果、権利・自由よりも国家統治構造と党の役割が前面に出る構成となっている。背景には、近代以降の憲政運動や 2010 年代の憲政論争、さらに 2018 年の憲法改正（中国共産党の指導性の明記）およびその後の習近平法治思想の制度化がある。他方で、学校教育は政治体制理解と権利意識の涵養を目指すものの、学んだ理念と社会現実の乖離が批判的意識を生む可能性も指摘できよう。

王天驕（名古屋大学大学院人文学研究科博士研究員）「1950 年代に日本から帰国した華僑青年の自己認識と世界認識の変容—在日華僑学校出身者を中心に—」

本報告は、1950 年代に日本から中国へ帰国した在日華僑学校出身の華僑青年に注目し、帰国前後の経験を通じて形成・再編された自己認識および世界認識の変容過程を明らかにすることを目的とする。まず、在日華僑青年の進路問題および中国政府による「帰国華僑学生」受入体制を整理し、帰国をめぐる社会的・制度的背景を確認する。次に、在日華僑学校における教育環境と、帰国華僑学生中等補習学校における思想政治教育を検討する。さらに、神戸中華同文学校校友会『校友会報』掲載の書簡と後年の回想録を対照し、社会主義祖国の建設への参与という言説のもとで、日本と中国を対比的に捉える世界認識と、国家の構成員として再定位される自己認識の変容を分析した。その結果、帰国直後に強調された国家との一体化は、後年には個人志望と国家配置のずれや歴史的経験を内包しつつ再解釈され、より複層的な自己認識・世界認識へと再編されていく過程が確認された。

武小燕報告は、現在の中国における憲法教育を学校教科書での記述を検討しながら紹介したものである。また近年の中国における憲政をめぐる研究者の議論についても言及している。貴

重な学術情報を多く含む、興味深いものであった。王天驕報告では、1950年代の神戸華僑を中心とした中国帰国運動を取り上げ、中国帰国者たちを追跡した。中国帰国にいたる経緯や、中国帰国後の活動状況について分析を加えている。新史料の発掘を含むもので、今後の研究の発展が期待される。〔記：川尻文彦会員〕

劉罡（愛知大学）「中国社会における抗日戦争の記憶の表象と継承——「九・一八」歴史博物館の実践を手掛かりに」

本報告は、中国・瀋陽市の「九・一八」歴史博物館を対象に、その展示実践を手がかりとして、中国社会における抗日戦争の記憶がいかに表象され、継承されているのかを検討したものである。具体的には、まず九・一八事変の歴史的経緯と博物館設立の背景を整理したうえで、常設展示の構成と空間演出を分析した。その結果、同館の展示は、日本の侵略の歴史的経緯、被害と受難の強調、中国軍民の抵抗と英雄化、さらに戦後の平和理念へと至る四段階の叙述構造によって成り立っていることを明らかにした。そこでは、中国人は単なる被害者としてではなく、苦難を克服し勝利へ向かった主体として描かれている。以上を通じて、本報告では同館が抗日戦争の記憶を再生産する装置であると同時に、中国人の帰属意識やナショナル・アイデンティティ形成に関わる重要な公共空間であることを示した。

三浦奈々（愛知大学大学院）「昭和天皇の三ヶ根山訪問に関する試論」

本発表は、1979年の昭和天皇愛知行幸、とりわけ三ヶ根山周辺を中心に第30回全国植樹祭と殉国七士廟との関係を検討したものである。植樹祭は藤岡町（現・豊田市）と鳳来町（現・新城市）の2会場で開催されたが、両会場の位置関係から三河湾地域への立ち寄りが可能になり、三ヶ根山のグリーンホテル三ヶ根が宿泊地として選ばれた点に着目した。三ヶ根山には東京裁判で処刑されたA級戦犯7名を祀る殉国七士廟が建立されており、戦後の戦犯慰霊の場として知られる。昭和天皇は1975年以降靖国神社参拝を控えていたが、三ヶ根山滞在中に殉国七士廟方向へ向かい佇立していたという証言も残る。こうした証言や行幸の動線、宿泊地選定の背景を検討し、国際情勢の中で公的参拝が難しい状況において、三ヶ根山が戦没者・旧臣への追悼を意識させる場所としてどのような意味をもったのか考察した。

劉罡報告は、「九・一八」歴史博物館の展示のナラティブを解読し、抗日戦争の記憶継承と国家への帰属意識形成の関連づけを考察する興味深い研究である。質疑応答では、公式の歴史認識の変化が歴史博物館の展示にどう反映されるのかも、調査が必要であろうとの意見、また、博物館建設計画や展示内容自体が対日意識に基づくのではないかと、記憶の客観視をどのように確保するか考える必要があるとの意見があった。

三浦報告は、昭和天皇が愛知行幸の際に従来とは異なる「グリーンホテル三ヶ根」に宿泊した経緯について、スケジュールや交通状況の合理性等を検討し、天皇の旧臣追悼の意図を考察する研究である。質疑応答では、ボランティアへの聞きとりや天皇自身の談話など真偽不明な史料の扱いがやや断定的すぎる点が指摘され、公的資料を用いた実証的な調査および先行研究の提示を充実させることで、仮説の説得力を高めるべきとの意見が複数名からあった。また、今後発表者が天皇訪中について研究を進める予定であることについて、皇室外交と政府外交を

切り分けることは可能かとの質問に対しては、法律上皇室外交は外交ではないことになっており、あくまでも「外交的作用」に落とし込みたいとの説明があった。[記：花尻奈緒子会員]

#### ■学会スケジュール（予告とお知らせ）

##### □西日本部会 2026 年度大学院生研究報告会

西日本部会では 2026 年 7 月 4 日に 2026 年度大学院生研究報告会を福岡大学にて実施いたします。なおプログラム等の詳細については学会ウェブサイトにて告知する予定です。

##### □関東部会 2026 年度修士論文報告会

関東部会では 2026 年 7 月 11 日に 2026 年度修士論文報告会を実施いたします。なおプログラム等の詳細については学会ウェブサイトにて告知する予定です。

#### ■第 22 回太田勝洪記念中国学術研究賞受賞の発表・授与について

第 22 回太田勝洪記念中国学術研究賞は、以下の 1 作品が受賞し、1 月 24 日に開催された授賞式において賞状と副賞が授与されました。

許楽「社会主義中国における雇用の世襲——「子女代替就業政策」の断続的实施過程」（『中国研究月報』第 79 巻第 12 号）

#### ■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

小笠原淳『台湾山地を愛した女 坂口禰子の生涯と創作』明石書店

須藤瑞代・清水賢一郎・藤井敦子・石川照子・島田大輔・杉本史子・姚毅・山崎真紀子『近代日中女性による「非体制」の模索——竹中繁と月曜クラブ・一土会』春風社

吉田豊子『民族主義と現実主義の狭間で——辺疆問題を中心とする中国国民政府の対ソ連外交 1943～1947 年——』汲古書院

=====

日本現代中国学会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18

一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

E MAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984

広報委員長：川尻文彦（愛知県立大学）

ニューズレター編集：和田知久（中部大学）

日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====